

# 「老舗」を生きる

「千年、働いてきましたー老舗企業大国ニッポン」(野村進著・角川書店)という本によれば、世界最古の会社は日本にあり、その創業は飛鳥時代で1400年以上の歴史だといえます。日本の最先端技術も創業100年以上の老舗といわれる企業の知恵によるものも多いそうです。盛岡もまた創業100年以上を誇る企業が残っている町です。時代の荒波を乗り越え、生き残ってきた盛岡の老舗に、経営のヒントを探ってみました。



## 時代を生き抜く老舗の力

日本は、人のみならず、企業も長寿国家です。それでも東京商工リサーチの倒産情報によれば、平成19年の岩手県の倒産件数は105件。ましてや過去には人災・天災があり、生き抜いてくることは至難の業だったのではないでしようか。

当会議所では、そんな困難を乗り越え、盛岡で創業・開

業して100年以上事業を営んでいる企業を対象に創業記念表彰を始め、今年2年目を迎えました。すでに10社が受賞しています。その受賞者の中から、2人の社長に老舗ならではの長寿企業経営のヒントを探りました。

## 社会に生かされる企業

創業1638年。今年で371年目を迎える(株)木津屋本店。もともとは、織田家に

仕える武士の出であった創業者は、国書偽造の咎で盛岡預かりとなった京都の学僧「方長老」を慕って、この地に来ました。そして師の教えを受け、創業。筆墨紙などを扱って、萬小間物「木津屋」が生れました。

多くの盛岡商人が時代に翻弄され倒れていった中、なぜ生き残れたかを尋ねると「運がよかったんだと思います」と池野裕治社長は答えてくれました。池野社長は、創業から14代、盛岡に当主が定住するようにになって、12代目にあたります。

「明治維新、金融恐慌、第2次世界大戦」、社会全体がガラッと変わったときは当主がどんなに優秀だって、一人だけではどうにもならないでしょう。社会から支えてもらわなきゃ残れない。そして社員もちゃんとしていたからこそ今があると思います」社長の口にした「運」とはつま

り、一族の力だけではなく、社会によって生かされた感覚なのでしょう。しかし運とは何もしない者には訪れないものです。地域ではなぜ木津屋を支えたのでしょうか。

## 儲けだけではない姿勢

「儲けるつもりなら、大きくできた時がありました。ヤミ市とかね。でも公定価格を維持したと聞いています。そうでなければ信用を勝ち取れなかったでしょうね」と池野社長は言います。

取材の間、度々社長の口から出てくるのは「信用を勝ち取る」という言葉でした。正直に商い続け、信頼を得てきたからこそ社会もまた応援してきたのではないでしようか。

## 現代に通用する「訓え」

木津屋のそんな選択のバックボーンに、方長老から授かった家訓(社訓)があります。

- 一、慈悲を本とすべし
- 一、正直を守るべし
- 一、自他利益を旨とすべし
- 一、平等に客を敬うべし
- 一、遵法奉公を重んずべし

370年前の訓えは現代にも合うものかと問いかけると、「今でも通じると思いますよ。『慈悲』は人間的な商売をしるということだと思われ、コンプライアンス(法令遵守)もある」と池野社長。国内の企業の不祥事のニュースを耳にするなか、「正直」の訓えは情報化社会の今こそ大切に思えますし、「自他利益」もビジネス語「Win-Win」に通じます。

企業であれば増収や事業拡大に貪欲になるものですが、木津屋は違うようです。「局面が来て、大きく羽ばたけるのなら取り組みたいが、背伸びをしたくはないです」。飾った言葉が出てこない、実直な社長の姿勢が見えました。





薬剤師の資格を持つ社長は、薬局に出ることも（上）。



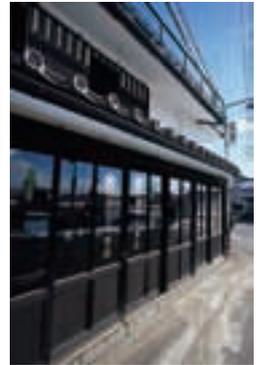
社員のアイデアで誕生したくすりん君のついた「むらげんマイバッグ」（右）。



薬屋ならではの看板の数々。今はない薬の看板は、まさしくお蔵入り。特別に蔵出ししてもらいました。



いまだ現役の事務所は江戸時代のもの。県指定の重要文化財。金融恐慌のおおりで流れたものの、昭和の初めにはレンガ造りにする計画もあったそう。



「建物」をほめてばかりいると「中の人間の身にもなってよ」と池野社長は笑います。維持していくのは苦労も大きいよう。事務所や蔵は、子ども時代の遊び場だったそうです。そして、かなりレトロなレジスター。「まだ動くよ」と社長（右）。

### 盛岡創業記念表彰老舗年表

- 1597年 盛岡城築城開始
- 1599年 盛岡城に南部信直居住
- 1603年 徳川家康江戸幕府開府
- 1606年 ■十一屋(株) (下ノ橋町) 創業
- 1609年 上の橋完成
- 1613年 村井新七盛岡で創業。(盛岡商人の主流の一つ近江商人)
- 1615年 ■(有)岡沼折箱店(紺屋町) 創業
- 1618年 ■橋本屋本店(本町通) 創業
- 1625年 ■(有)鈴木盛久工房(南大通) 創業
- 1633年 3代目藩主重直、盛岡城を藩主の居城に定める
- 1635年 方長老盛岡預かりとなる(1658年帰還)
- 1638年 ■(株)木津屋本店(南大通) 創業
- 1650年 ■徳清倉庫(株)(仙北町) 創業
- 1767年 ■(株)平金商店(肴町) 創業
- 1810年 ■(株)山清商店(仙北町) 創業
- 1816年 ■莫産九・森九商店(紺屋町) 創業
- 1834年 木津屋本店類焼、再建
- 1857年 ■(株)村源(肴町) 創業
- 1868年 戊辰戦争
- 1869年 南部氏白石転封
- 1872年 豪商鍵屋、銅山の採掘権没収(尾去沢銅山事件)
- 1874年 小野組破産
- 1881年 会議所の前身、商法会議所を開設
- 1931年 県下、金融恐慌、銀行パニック

■は第1回、■は第2回受賞事業所

「知識がないと知恵が出ない」とスタッフの学びの場を月3回設けています。内容は季節に合う薬や、メーカーによる新薬の勉強。人に教えるのが一番覚えると、外部講習会の参加者が講師に立つこともあります。業種を問わず、

村源では現在、後継者を養成中。「自分も先代に言われたように、『仕事はまず好きなようにやれ』と話しています」と、村井社長。在任中なら失敗のフォロワーもできま

「信頼を積み重ねて」  
生きていく老舗は、常に時代と向き合っています。そして社長が独りで経営するのではなく、社員や一族と共に会社をつくってきました。木津屋、村源の2社は、共通する「信頼」という見えない商品を持っていきます。受け継がれてきた老舗の歴史は、信頼の証。企業とお客さまが信頼の絆で結ばれているのです。独自のスタイルを持ち、時代の変化に対応しながら、「あそこなら間違いのない」という人々の、信頼に応えるための努力や発想をいかに大切にできるかが、企業存続の鍵といえるかもしれません。

取材／SANS A企画編集委員会

### 長寿の秘訣は、社員教育

肴町の(株)村源は1857年創業、151年目を迎えます。「うちが長く続いたきたのは、守りに入れば潰れるとの考えから攻めの姿勢でいたことと、社員教育だと思えます」と話すのは、6代目にあたる村井晃社長。薬局はマニュアルがきかない接客業だけに、正しい情報をお客様に与え、信頼されるために、昔から社員教育に力を注いできたそうです。「父はもつと厳しかった」と村井社長は述懐します。

### 失敗を恐れぬスタイル

仕事は社員に任せ、責任感を感じてもらいながら取り組ませているとのこと。「でも小さい会社だから見えちゃうんだよね。そんな時は直接言う。ただ『ああしろこうしろ』ではなく『なんでこうして？』と聞きますね。でないと考えないでしょ。昨年の村源150年記念事業も、社員アイデアを駆使。エコバッグや新キャラクターも登場しました。

### 信頼を積み重ねて

自分が経験した良いサービス、店の飾り方なども報告し合い、社員同士で研究していきます。

「実際は失敗されると困っちゃうんだけど、抑えちゃうと伸びがないでしょ」村井社長は笑いました。